

ロックにおける観念の内実 —感覚的知識と可想的な観念—

春日 亮佑

1. はじめに

ジョン・ロックは『人間知性論』（以下、『知性論』）第4巻で知識について以下のように定義している。

知識とは私にはただ、我々のある観念同士¹の結合や一致、不一致や背馳²の知覚であるように思われる。（E4.1.2）

知識とは、我々の持っている二つの観念同士の一致・不一致を知覚することなのである¹²。その上で、彼は知識を三種に分類する。

第一は直観的知識（intuitive Knowledge）であり、これは「白は黒ではない」、或は「円は三角形ではない」といった、他の観念の介在のない、二つの観念間の一致・不一致の直接的な知覚である（E4.2.1）。第二は論証的知識（demonstrative Knowledge）であり、「三角形の内角の和は二直角に等しい」といった幾何学の証明のように、中間観念（intermediate ideas）を通じての一致・不一致の知覚である（E4.2.2-3）。これは理性の推論によって知覚されるため、理知的知識（rational Knowledge）とも呼ばれる（E4.7.15）。第三は感覚的知識（sensitive Knowledge）である。これは感覚によって得られる知識であり、「トマトがある」といった、我々の外の有限的存在者に関する知識である。

しかし、第三の感覚的知識はこれまで、ロック自身の知識の定義に反するよう³に見做されてきた。感覚的知識は観念同士の一致・不一致ではなく、観念と外的な事物との一致・不一致であるように思われるからである。結果、ロックの知識論は一貫性を欠いたものとして捉えられてきた。

そこで、本稿では2節で、存在の観念を感覚的知識における観念として解釈することで、こうした批判が妥当しないことを示す。とはいえ、存在の観念とはどんなものなのか。3節では、存在の観念の内実を明らかにすることで、ロックが

像や感覚与件を意味する可感的な観念だけでなく、概念や意味としか言いようのない可想的な観念をも想定していたことを明示する。その上で4節では、感覚的知識がもたらされる感覚知覚の場面において、これらの観念がいかんにして働いているのかをそれらの統一的構図と共に示し、本稿を終えたい。

2. 知識の定義と感覚的知識

「トマトがある」という感覚的知識を得る時、我々は観念同士を知覚していないのではないか。というのも、この命題は、トマトの観念とトマトという語によって表される何らかの存在者との間の関係について言明しているように思われるからである。ならば、感覚的知識は「観念間の一致・不一致の知覚」というロック自身による知識の定義に反するのではないか。このような立場を採るのがロウやウルハウスなどである³。たとえばロウは「感覚においては、「外的な」対象によって我々の内に表面的に産出された観念は、我々が持っている他の観念と「一致」や「不一致」の何らかの関係にあるというよりは寧ろ、外的な実在と「一致」や「不一致」の関係にあるように思われる」（Lowe 2013, 173）と述べている。また、ウルハウスも「感覚的知識は、二つの観念間の何らかの結合ではなく、我々の現在の知覚や観念に対応する、現在、世界に存在する何らかのものについての知識である」（Woolhouse 1994b, 154）と指摘している。

では、感覚的知識はロウやウルハウスらが指摘しているように、ロックの知識の定義に反するのか。このことについて検討するため、ウーズリーの議論について見ていきたい。彼の議論を見ていくことで、感覚的知識の整合性の問題が明らかになるからである。

ウーズリーはまず、ロックは知覚されるのが観念間の一致・不一致だけだと明確に言っているわけではない、と認める（Woozley 1977, 141-2）⁴。こうした解釈に基づいて、感覚的知識を観念間の一致ではなく、観念と物理的原因との一致だと考えるのがヨルトンである（Yolton 1970, 110）。しかし、ウーズリーによると、ヨルトンの解釈は誤っている。というのは、(1) 観念間の一致以外にも一致がある、ということと (2) 観念間の一致以外にも知覚される一致がある、ということとは区別されねばならないのに、ヨルトンは (1) から (2) を擁護不可能な仕方でも導出しているからである（Woozley 1977, 142）。そして、ロックは (1) を信じていたが、(2) は信じていなかった。(1) を支えるテキスト上の根拠はあっても (2) を支える明確な根拠はないからである（Woozley 1977, 142-4）。要するに、

ロックの知識の定義だけからは、確かに知識は観念間の一致の知覚以外にもありえるが、『知性論』の他の箇所と併せて考えるならば、それはやはり観念間の一致・不一致の知覚に限られると捉えるべきだ、というわけである。では感覺的知識とは、どのような知識なのか。ウーズリーは、感覺的知識もまた観念間の一致・不一致の知覚であると捉える。感覺的知識は感覺の観念と存在の観念との間の関係の知覚だからである。そして、このように感覺的知識を捉えるならば、ロック自身の知識の定義とも整合する、というわけである (Woozley 1977, 144-6)。

ウーズリーのように、感覺的知識もまた観念間の一致・不一致の知覚として捉えられると考えるのが、ニューマンや一ノ瀬である。ニューマンは感覺の二つの役割について「事實的 (veridical) には、感覺は外的な事物と因果的な関係にあるのであり、そうであることによって (厳密には知られていない繋がりではあるものの) 認知的なつながりを確立する。観念的には、感覺は他の観念と一致の関係にあるのであり、そうであることによって感覺に対する内省的な注意が知識の定義を充足することを可能にする」(Newman 2007, 324) と述べている。また、一ノ瀬も「感覺的知識は「心の中の観念」と「私たちの外なる何ものかの存在」、つまりは「観念」と「リアリティ」とにまつわる知識である […] ロックの捉える「リアリティ」も「観念」の一つであり、その意味で「感覺的知識」は、「リアリティ」に関する「知識」だとしても、「観念の一致・不一致の知覚」というロック的「知識」規定に反していない」(一ノ瀬 2007, 171) と論じている。

果たしてウーズリーらの解釈は妥当なのか。結論から言えば、妥当であるように思われる。感覺的知識を感覺によって得られる観念と存在の観念との間の一致・不一致の知覚と捉えることは可能だからである。実際、ロック自身、「いかにして我々は感覺によって事物の現実存在を知りうるのか」というスティリンググリーートの反論に対して、以下のように述べている。

この場合に一致するものとして知覚され、そしてそれによって知識を産出するのは、現実的な感覺の観念 (それは私が明晰判明な観念を持っている行為である) と、そうした感覺を引き起こす私の外の現実的な存在 (actual existence) の観念である。(W4.360)

つまり、ロックは感覺的知識を観念と外的な事物との間の一致・不一致の知覚ではなく、観念同士の一致・不一致の知覚だと考えていたのである。ならば、ロウやウルハウスなど多くの論者のように、感覺的知識を知識の定義に反するものと

して捉えることには無理がある。

これに対して、ヨルトンやリックレスはロックがスティリングフリートによる圧力の下、回答を誤ったと考える (Yolton 1970, 111-2; Rickless 2008, 98)。しかし、ロックはまさに感覚的知識についての質問に答えているのだから、この箇所を無視することは出来ない。それどころか、彼が一貫してスティリングフリートに対しても知識を観念間の一致・不一致の知覚と考えていたことは次の返答からも明らかである。

あなたは私の「知識や確実性は諸観念 (ideas) の一致・不一致の知覚に存する」という命題を、私が他に確実性の個別的な根拠を持っているかのように、確実性の一般的な根拠と呼ぶが、私はこのこと以外にいかなる確実性の根拠や思念をも持っていない。(W4.287)

このように、ロックはスティリングフリートに対しても、自身の知識の定義を主張し続けていた。ならば、やはり感覚的知識は感覚知覚によって得られる観念と存在の観念との一致・不一致の知覚だと考えるべきだろう。とはいえ、「存在の観念」とは何か、明らかにせねばなるまい。次節では、存在の観念の内実について論じる。

3. 存在の観念

存在の観念とは何か。これを明らかにせずして、ロックの感覚的知識を整合的に理解することは出来ない。存在の観念が理解不能なものであるならば、感覚的知識がロックの知識の定義に整合するという主張自体が空虚なものになるだろう。実際、エアーズは感覚経験において、白の観念についての存在の観念と見做されるものがないことから、ロックの知識の定義との整合性の問題を指摘している

(Ayers 1991, 159)。では、エアーズの述べているように、存在の観念は感覚経験において見出すことが困難なものなのか。そうではない。エアーズはロックの「観念 (Idea)」の含意を十分に捉えきれていないからである。

エアーズによると、ロックの観念には像や感覚与件といった「可感的 (sensible)」な意味しかない。そのため、彼は感覚的に知覚出来ない、意味や概念といった「可想的 (intelligible)」な観念を一貫して明確に否定している (Ayers 1986; Ayers 1991)⁵。その結果、彼は存在の (抽象) 観念を単に存在すると考えられている何らかの事

物の観念と捉え (Ayers 1991, 49)、デイヴィッド・ヒュームが対象の観念と異なる存在の観念はないと考えたように、感覚的知識における存在の観念の役割に困難を見て取った (Ayers 1991, 159)。

このように存在の観念について理解するならば、ロックの感覚的知識は再び困難に陥るだろう。では、エアーズの解釈は正しいのか。そのためにもロック自身の言明について見てみよう。

存在と単一の観念は、我々のあらゆる外的な対象とあらゆる内的な観念によって知性に示唆される、二つの別個な観念である。諸観念が我々の心の内にある時、我々は事物が我々の外に現実的に存在すると考えるのと同様に、それら [諸観念] が現実そこに存在すると考える。すなわち、それらの観念が存在する、或は存在を持つと考える。(E2.7.7)

存在の観念とは、我々が観念を受け取った時に示唆されるような観念なのである。たとえば、我々は目の前に置かれたトマトを見たならば、我々はまずトマトの色や形などの観念(像)を知覚する。その上で、色などの観念を我々に知覚させる何かが存在すると考える。存在の観念とはこのような観念である。

エアーズの解釈に戻ってみよう。エアーズによると、存在の観念とは存在すると考えられているトマトの像である。このように捉えるならば、存在の観念はトマトの観念と変わらないだろう。しかし、注目せねばならないのは、ロックが存在の観念を、知性に示唆される観念だと述べていることである。示唆されるということは、単に像や感覚与件を受け取るのとは大きく異なるからである。実際、*OED* の *Suggest* の項目からも明らかのように、示唆するという語には単に像や感覚与件を知覚するという意味はない。ならば、エアーズのように、示唆されて得られる存在の観念を、その対象の像と同一視することは出来ないだろう。

では、どのように捉えればいいのか。先ほどのエアーズの解釈は、ロックの観念を像や感覚与件に限定したことに由来する⁶。しかし、そもそも存在自体、色や形のように、具体的なもののイメージによって説明することは出来ない。ならば、差し当たりここでは、存在の観念を感覚的に知覚出来ないもの、すなわち概念や意味としか言いえない、可想的な観念として捉えるべきではないのか。このことについて、富田は当該箇所 (E2.7.7) から「この「…と考える」ということ、すなわち概念的に把握することが、「示唆される」ということを心の作用の側から見た場合の表現にほかならない」(富田 1991, 18) と指摘している。

では、可感的な観念でない存在の観念とはいかなるものか。ロックは次のように述べている。

したがって、他の事物の存在についての覚知を我々に与えたりし、我々がいかにしてそうなるのか知ったり考えたりしないだろうが、我々の内にその観念を引き起こす何かがあるが、我々の外にその時点で存在するということを我々に知らせたりするのは、外からの諸観念の現実的な受容である。(E4.11.2)

我々は現実的に観念を受容することで、存在の観念を得る、というわけである。それは、そうした観念を引き起こす何かがあると、たとえその仕方がわからなくても、我々は知らされるからである。ここでの「覚知を与える」や「知らせる」という記述は、先ほどの「示唆される」と同じことを意味していると考えるのが自然であろう。そして、存在の観念は可想的な観念として考えるべきであることが確認された。ならば、我々に観念を引き起こす当のもの、すなわち観念の原因となるもの、その示唆こそが存在の観念の知覚だと考えるべきではないか。というのも、我々が示唆されて存在の観念を得るのは、感覚的な観念の受容から、その原因を示唆されることによるからである⁷。無論、「存在」の観念と「原因」の観念とはそれ自体としては異なるものである。寧ろ、「存在」の観念は「原因」の観念を用いることで得られるような観念であろう。しかし、私がここで述べているのは「存在」の観念＝「原因」の観念ということではなく、感覚知覚によって得られた観念の原因になるもの、その示唆されるものが「存在」の観念を得ることである、ということである。

このような存在の観念は、単なる像としての可感的な観念とは異なる。それは、像の原因として概念的に把握されるような観念である。つまり、赤や円形の可感的な観念を知覚し、それらを引き起こす原因の観念を示唆されることで、我々は両者の観念との間に一致を知覚し、そしてそれらが現実的に行われる場合に「トマトがある」という感覚的知識を得るに至るのである。

このように、本節では存在の観念の内実について考察した。それはヒュームやエアーズが解釈するような、対象そのものと同じである可感的な観念ではなく、原因を示唆されることで概念的に把握されるような、可想的な観念なのである。とはいえ、こうした可想的な観念は可感的な観念といかに関わっているのか。次節では、感覚知覚において両者の果たす役割に注目することで、このことについて見ていきたい。

4. 可感的な観念と可想的な観念

これまでの感覚的知識をめぐる議論で、ロックの観念に可感的な用法だけでなく、可想的な用法もあることが明らかになった。ならば、彼の観念は多義的で統一性を欠いたものなのか。こうした点はこれまで、ライルやウルハウスらによって指摘されてきた。ライルはロックが観念をいくつもの完全に異なる意味で使っていると批判し、彼の観念をパンドラの箱になぞらえている (Ryle [1932] 1971, 134)。また、ウルハウスはそれが概念なのか像なのか不明瞭である、と評している (Woolhouse [1971] 1994a, 34)。これに対し、富田は「…として見る」という、理論負荷的な知覚の場面を読み取り、両者の統一的構図を指摘した (富田 1991, 13-45)。本稿では、富田の解釈を認めつつも、異なる解釈を提示したい⁸。そこで、以下では可感的な観念と可想的な観念との関わりについて明らかにするため、本節ではロックの「心の機能」に関する議論に注目し、感覚知覚の場面に即して論じる。

ロックは『知性論』第2巻で、単純観念について説明した後、心の機能 (faculty of the Mind) について論じる。最初に論じられるのが「知覚 (Perception)」である。そこで彼は、感官を通して知覚される観念がしばしば覚知 (notice) されることのない「判断 (Judgment)」によって変容されることを指摘する。それは、習慣的習性 (habitual custom) によって可能になる。これにより、球が目の前に置かれた時にそれを平らな円としてではなく、球として知覚する。そのため、モリニュー問題への回答に見られるように、こうした判断を経験していない生まれつきの盲人は、開眼した時に視覚によって立方体と球体とを区別出来ない (E2.9.8)。この判断が覚知されないのは、あまりに素早く行われるからである (E2.9.10)。

議論を再構成してみよう。我々が球状のものを見る時、そこから視覚的に得られる可感的観念だけを用いるなら、それは円形の物体として知覚される。すなわち、両者の差異を形に関する可感的観念によっては区別出来ない。しかし、我々はそれらの一方が球体であり、もう一方が円であることを現に知覚出来る。それは、光の反射から、その円が本来は球であることを判断するからである。こうした判断は経験的に身につけられる。そして判断することが内省から得られる観念であることから (E2.7.2)、判断もまた心の機能によってもたらされる、心の作用 (Operation of the Mind) の一つである⁹。ロックの議論はこのように捉えられよう。

では、判断するという事で、具体的には何を行っているのか。「机の上に置かれたトマト」を「知覚」する際に、次のように「知覚」していると解釈出来よう。我々はまず、(1) 机の上のトマトの感覚与件を受容する。しかし、これだけでは「机の上のトマト」という観念は得られない。それをひとまとまりの実体として「知覚」出来ないからである。そこで、(2) 受容された可感的な観念を把持する。「把持 (Retention)」とは、記憶の他に「心に入ってくる観念をしばらく現実に眺める」(E2.10.1) ことである。ここで「しばらく (some time)」と述べているのは、我々が知覚をするのに一定の時間を要するからである。つまり、ある程度その可感的な観念を眺めなければならないと述べているのである。とはいえ、これではまだ、「トマト」を一つの実体として「知覚」出来ない。トマトと机が別個であること、すなわち机とトマトが一体となっているような実体でないことを区別出来ないからである。そこで次に、(3) 可感的な観念、すなわち視覚像をその範型 (Archetype) と比較する。この場合、範型となる実体は感覚的に知覚出来ない (E2.31.6)。それは想定された、概念なのであり、可想的な観念である。そして、「比較 (Comparing)」とは、「範囲や程度、時間、空間、或は何らかの他の状況」(E2.11.4) に関して行われるのだが、一般観念のような可想的な観念についても行われる (E2.11.5)。そのため、ここでは可想的な観念である、実体の範型に対して行われる。ただし、これだけではまだ「赤いトマト」をひとまとまりの実体として「知覚」出来ない。実体の範型が可想的である以上、ひとまとまりの実体があるということが概念的に理解されても、どれがひとまとまりの実体なのか分からないからである。(4) そこで用いるのが、識別の機能である。「識別 (Discerning)」とは、いくつかの観念を区別する機能であり、それによって異なる対象や性質を知覚する (E2.11.1)。トマトの観念と机の観念の差異を識別することで両者を異なる観念として捉え、実体の範型と比較することでそれを一つの「赤いトマト」として捉え、(5) 判断し、「知覚」するのである。

このように理解するならば、ロックの観念がただ多義的で統一性を欠いているわけではないことがわかるだろう。我々は心の機能によって想定された可想的な観念を用いることで、感官から受容された可感的な観念を知覚するのである。ならば、一見多義的で統一性のないように思われたロックの観念も、実は「知覚」の行われ方を考察する際に密接に結びついていることが理解されよう。可感的な観念も可想的な観念も単一の「知覚」の際に共に心によって用いられているものなのであり、だからこそロックはそれらを観念という一つの語で呼んだのである。

「知覚」の行われ方を考察する際、想定されるのは可想的な観念だけではない。

実は、可感的な観念までも、単一の「知覚」という事態を説明するために導入されたものとして捉えられるべきである。我々は実際に「知覚」を行う際、可感的な観念と可想的な観念とを区別していないからである。可感的な観念と可想的な観念とが区別されるのは、「知覚」を説明する時に限られる。そして、その説明は「知覚」の発生に関する物理的、或は心理学的な記述によってなされるわけではない。その説明は、我々の「知覚」のあり方を、認識論的に分析することで行われるのであり¹⁰、可感的な観念も可想的な観念も、その際にいわば道具として導入される語なのである。ならば、可感的な観念までも、知覚という現象を説明するために想定されたものとして理解出来るだろう。ロックは自身の観念説——「観念の道 (The Way of Ideas)」——によって、「知覚」のあり方を記述したのである (記述という平明な方法 (Historical, plain Method))。

5. おわりに

本稿では、まずロックの感覚的知識が、「観念同士の一致・不一致の知覚」という自身の知識の定義に反するのではないか、という問題について考察した。その結果、ロックが感覚的知識を感覚によって知覚される観念と存在の観念との一致・不一致の知覚だと考えていたこと、すなわち知識の定義に反しないことがわかった。とはいえ、存在の観念とは何か。3節では、存在の観念の内実について検討した。すると、存在の観念は知覚の際に示唆されることで得られることが明らかになった。つまり、存在の観念とは、知覚によって直接に与えられるような、像や感覚与件などの可感的な観念と異なり、寧ろそれらを獲得することでその原因として理解される、概念や意味などの可想的な観念なのである。とはいえ、可感的な観念と可想的な観念とはどのように関わっているのか。ロックは観念という語を融通無碍に用いていたに過ぎないのか。そこで、4節では、感覚知覚の場面に注目することで、両者の連関に注目した。結果、それらが我々の「知覚」のあり方の説明において連関を持ち、統一性を持っていることが明らかになった。そればかりか、それらは実は、「知覚」について考察し記述するために、ロックのいわば道具として想定されたものであることがわかった。以上、ロックの観念の感覚知覚における統一的側面を指摘し、本稿を終えることにしたい。

¹ 知識を、「二つの」観念同士の間の関係として捉えているのは、ロックが関係を常に二項関係として捉えていることに由来している (E2.25.6)。

² ロックによると、こうした一致・不一致は以下の四種類に存する。それは「同一性又は差異性」、「関係」、「共存又は必然的結合」、「実在」である (E4.1.3)。無論、感覚的知識とは、この四つ目の一致・不一致に関する知識である。ここで、一つ目の「同一性又は差異性」は二つ目の「関係」に含まれるのではないか、と思われよう。このことは、ロックが『知性論』第2巻で同一性や差異性を関係として認めているため (E2.27.1)、至極当然なように思われる。また、同様に三つ目の「共存又は必然的結合」もまた、関係に含まれるように思われよう (cf. E4.1.7)。しかし、ここでロックが述べている「関係」とは、ウルハウスも指摘しているように、一つ目や三つ目を含むような関係一般のことではなく、その他の関係のことを指している (E4.4.18)。そのため、こうした問題は該当しない (Woolhouse 1983, 58)。

³ Cf. Aaron 1971, 238-40; Gibson 1917, 166; Jolley 1999, 187; Mabbott 1973, 91; O'Connor 1967, 183; Yolton 1970, 110.

⁴ ロックの知識の定義に関する、こうしたウーズリーの解釈には問題があるように思われる。というのも、ニューマンやリックレスらが指摘するように、ロックは明確に「我々の知識は、ある二つの観念の一致・不一致の知覚に存する」(E4.2.15) と何度も述べているからである (Newman 2004, 278; Rickless 2008, 85-6; Stapleford 2009, 208n8)。しかし、ウーズリーのように捉えてもロックの感覚的知識は観念間の一致・不一致の知覚であるということが明らかになるため、本稿では彼の議論を用いる。

⁵ 「可感的 (sensible)」と「可想的 (intelligible)」の用法は富田に従った (Tomida 2001; 富田 1991)。ロウはそれぞれに対して「知覚対象 (percepts)」と「概念 (concepts)」という名称を用いている (Lowe 2005, 25)。

⁶ 意味や概念といった観念の用法を明確に否定するエアーズに対しては、これまでソールズや富田らによる直接的な批判が加えられてきた (Soles 1999; Tomida 1996; 富田 1995)。本稿では言及しないが、彼らの批判は妥当なものであるように思われる。

⁷ これは『省察』でのルネ・デカルトの「神の第一証明」を思い起こさせる議論であるが、「夢の懐疑」など、『知性論』において様々な『省察』での議論が登場することから、思想的にも不自然な解釈ではないように思われる。

⁸ 理論負荷的な知覚については、拙論で言及した (Kasuga 2014)。

⁹ 心の作用が経験的であることは、彼の抽象観念に関する議論からも伺える (E4.7.9)。

¹⁰ Cf. O'Connor 1967, 29.

[参考文献]

(1) ロックの著作

ロックの著作からの引用は、以下のテキストにより引用箇所を本文中括弧内に表示する。その際、『人間知性論』については略記号 E を用いて順に巻数・章数・節数を付した。書簡など、他の著作に関しては以下の『全集』から引用し、略記号 W を用いて順に巻数・ページ数を付した。

『人間知性論』: Nidditch, P. H. ed. 1975. *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford University Press.

『全集』: 1963. *The Works of John Locke: A New Edition, Corrected*, 10 vols. Scientia Verlag Aalen.

(2) その他の著作

Aaron, Richard. I. 1937/1955/1971. *John Locke*, Oxford University Press.

Ayers, Michael. R. 1986. "Are Locke's "Ideas" Images, Intentional Objects or Natural Signs?," *The Locke Newsletter*, vol. 17, 3-36.

———. 1991. *Epistemology*, vol. 1, bk. 2 of *Locke: Epistemology and Ontology*, Routledge.

Gibson, James. 1917. *Locke's Theory of Knowledge and its Historical Relations*, Cambridge University Press.

Jolley, Nicholas. 1999. *Locke: His Philosophical Thought*, Oxford University Press.

Kasuga, Ryosuke. 2014. "Perception of Ideas in Locke's: An Essay concerning Human Understanding," *The Proceedings of the 9th BESETO Conference of Philosophy*, 234-43.

Lowe, Jonathan. E. 2005. *Locke*, Routledge.

———. [2005]2013. *The Routledge Guidebook to Locke's Essay Concerning Human Understanding*,

- Routledge.
- Mabbott, John. D. 1973. *John Locke*, The Macmillan Press.
- Newman, Lex. 2004. "Locke on Sensitive Knowledge and the Veil of Perception: Four Misconceptions," *Pacific Philosophical Quarterly*, vol. 85, 273-300.
- . 2007. "Locke on Knowledge," in *The Cambridge Companion to Locke's "Essay Concerning Human Understanding"*, Newman, L. (ed.), Cambridge University Press. 313-51.
- O'Connor, John. D. 1967. *John Locke*, Dover Publications.
- Rickless, Samuel. C. 2008. "Is Locke's Theory of Knowledge Inconsistent?," *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 77, no. 1, 83-104.
- Ryle, Gilbert. [1932] 1971. "John Locke on Human Understanding," in *Critical Essays*, Routledge. 132-53.
- Soles, David. 1999. "Is Locke an Imagist?," *The Locke Newsletter*, vol. 30, 17-66.
- Stapleford, Scott. 2009. "Locke on Sensitive Knowledge as Knowledge," *Theoria*, vol. 75, no. 3, 206-31.
- Tomida, Yasuhiko. 1996. "The Imagist Interpretation of Locke Revisited: A Reply to Ayers," *The Locke Newsletter*, vol. 27, 13-30.
- . 2001. *Inquiries into Locke's Theory of Ideas*, Georg Olms Verlag.
- Woolhouse, Roger. S. 1983. *Locke*, Harvester Press.
- . [1971] 1994a. *Locke's Philosophy of Science and Knowledge*, Gregg Revivals.
- . 1994b. "Locke's theory of knowledge," in *The Cambridge Companion to Locke*, Chappell, V. (ed.), Cambridge University Press. 146-71.
- Woozley, Anthony. D. 1977. "Some Remarks on Locke's Account of Knowledge," in *Locke on Human Understanding*, Tipton, I. C. (ed.), Oxford University Press. 141-8.
- Yolton, John. W. 1970. *Locke and the Compass of Human Understanding*, Cambridge University Press.
- 一ノ瀬正樹. 2007. 「感覚的知識の謎——ロック知識論からするプロバビリティ概念の探究」, 哲学史研究会編『西洋哲学史再構築試論』, 昭和堂. 160-200.
- 富田恭彦. 1991. 『ロック哲学の隠された論理』, 勁草書房.
- . 1995. 「心像論的ロック解釈再考——エアーズに答えて」, 『京都大学総合人間学部紀要』, 第2号, 33-44.